

ナポレオンの生涯を辿ってみて

田端里美

本学図書館ではこの秋、ナポレオン生誕250年記念稀観書展示会として「ナポレオン、偉大なるエジプト文明に挑戦する」を開催いたします。この展示会の開催にあたり、私も微力ながらお手伝いをさせていただくことになりました。

私が本学図書館での仕事を始めたのは去年の冬になります。それ以前は公共図書館で働いており、今のような大学図書館での勤務経験はありませんでした。同じ図書館という名称ですが仕事内容はまったく異なるので、毎日が新しい発見の連続です。いろいろな仕事を覚えていく中で、ある時、稀観書展示会のお手伝いをしてみませんか、というお誘いを受けました。もちろん図書館での展示会は私にとって初めての経験で、私はナポレオンの生涯の年表を作成する仕事を行いました。私自身、今までナポレオンに焦点を当てて考えたことはありませんでした。私の中でのナポレオンは、ベルナル峠からアルプスを越える肖像画の勇敢なイメージが強く、ナポレオン本人が何をした人物であったのかはほとんど知りませんでした。

しかし展示会のお手伝いをさせていただくことは、ナポレオンとはどれほどの人で、どのような時代を生きてきたのかを知るきっかけとなりました。ナポレオンがいつどこで生まれ、誰と結婚し、いかにして最期の時を迎えたのか。その間にどこでどんな戦いをして、結果はどうであったのか。ナポレオンについて調べることで新しい知識が増え、自分自身の勉強にもつながったと感じております。

また私は展示会のテーマになっているナポレオンのエジプト遠征についてもほとんど印象に残っておらず、年表を作成する過程でナポレオンのエジプト遠征における実績を知りました。エジプト遠征では、フランス艦隊アブキール湾でイギリス艦隊との海戦に敗れ、軍事面では失敗に終わりました。しかしこの遠征に同行した学者や画家が現地の調査を行ったことで、ロゼッタストーンの見みや『エジプト誌』の刊行につながり、エジプト文明の研究に大きく貢献したとされています。

展示される資料のうち、1809年から13年の年月をかけて作成された『エジプト誌』は、ナポレオンが皇帝の地位に就いてから約5年後にあたります。本書は刊行が始まり、失脚後、さらに彼が亡くなった翌年の1822年ま



『エジプト誌』と筆者

で発行し続けられた20巻もある大著です。その内11巻は畳半畳ほどの大きさで、初めてこの資料を貴重書室で見た時は、あまりの大きさに驚かされました。ページをめくるだけでも慎重に手を運んでいたことが印象に残っています。他にも現在、大英博物館で所蔵されている原寸大のロゼッタ石のレプリカを見ることも初めてでした。

また、この展示会ではナポレオンに関する資料のみならず、ナポレオンの生きていた時代に世界はどのように動いていたのかが分かるような資料も併せて展示されています。たとえばイギリスではネルソン提督がフランス艦隊を打ち破り、アメリカでは大陸横断調査が行われ、日本ではオランダ東インド会社との交易が行われていたことが書かれた資料などです。

展示会に出展される資料は、今ではもう手に入らないほど貴重なものなので、他で見る機会もめったにないと思われます。これらの貴重な資料が、本学図書館の厳重な管理のもとで所蔵されていたことを知ることができたのは、今回の展示会の準備に参加させていただいたことがきっかけでした。展示会ではこのような貴重書の内容や社会的、あるいは国際的な環境なども捉え、その本がどのようにして作られたのかを知ることもできます。

今回の展示会で並べられる資料は、本学図書館の貴重書の中のごく一部にすぎません。他にも今では手に入らないような稀観的な資料を展示するように準備をしていますので、今秋の展示会にはぜひ会場へお越しください。

たばた さとみ（司書・非常勤職員）